様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　5 月　8 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007 年～2008 年
課題番号：19520409
研究課題名（和文）　英語構文の意味と構造の拡張

研究課題名（英文）　Extension of Meanings and Forms of Constructions in English

研究代表者　浅川　照夫（Asakawa　Teruo）
東北大学・高等教育開発推進センター・教授
研究者番号：50101522

研究成果の概要： I gave her a diamond 構文、He cheated her of a diamond 構文、He danced the night away 構文、She slept her hangover away 構文、The glass breaks easily 構文を検討し、構文の意味と形式の多様性を説明するためには、基本動詞の形式と意味に基づく「構文発生期」、基本動詞に意味が類似した新しい動詞群への「構文拡張期」、さらに構文の基本的意味を保持しながら動詞群がさらに拡大する「構文再拡張期」の三段階を考慮しなければならないことを立証した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学･英語学
キーワード：拡張、構文、語彙意味

１．研究開始当初の背景

構文の意味が構成単位の語彙項目から独立した自立的存在であると考えるか否かによって、構文の意味研究は二つの立場に分かれている。語彙意味論は、構文の意味は各構成単位がそれ自体持っている固有の意味を統語形式に沿って複合し、その結果派生された意味の総合体に過ぎないと強調し、構文文法は、構文を自立した文法単位と規定し、構文には構成単位の意味の複合からは得られない独自の意味が存在すると主張する。両理論共に長所と短所を持ち合わせているが、両理論の対立点ばかりが強調され、それぞれの長所を合流させて、より説得力のある構文理論へ高めようとする姿勢が欠如していた。

２．研究の目的

構文文法が動詞の意味と構文の意味の関係を論じる際に、構文の意味にこだわるあまり、動詞固有の意味の重要性を軽んじてしまったことは否めず、動詞の意味と構文の意味がなぜ結びつくのか説明することが困難で、

二つの関係は偶然の関係となっている。しかし、構文文法が、構文の多義性の間に見られる非対称的な意味関係を、プロトタイプ理論によって「に基づく」関係として捉えている点を見過ごしてはならない。この関係を子どもの言語習得の言語発達と関連させたのが「動的文法理論」であり、この思考法に基づけば、構文の拡張を、Light Verbs の形式と意味を中心とする「構文発生期」、動力学的関係の仮説に基づく「構文拡張期」、そして非動力学的関係による「構文再拡張期」の三段階に分けて考えることができる。本研究は、拡張の三段階説によって構文に関する理論の統合を試み、動詞の意味と構文の意味の関係を新しく視点から捉え直すことを目的とする。

３．研究の方法

「構文発生期」の研究では Slobin(1985)、Tomasello(1990, 2000a, 2000b)等の一連の調査研究によって構文の「原型」がいかに子どもによって習得されるか明らかになりつつある。「構文（再）拡張期」の研究としては Croft(1990, 1991), Goldberg(1995, 1999), Jackendoff(1990), Levin- Rappaport(1995)等、多くの文献が知られている。しかし、それぞれ分野の違い、理論的主張の違いにより統一的に構文研究に取り込むことができない状況にあるので、より包括的な思考法によって、これまでの研究を統合することが必要である。

動詞の意味と構文の形式と意味は、構文文法的な見方を採れば、当然、相互依存の関係にあるのだが、これまでの構文文法研究は、構文正当化のためにあまりにも構文に比重をかけすぎ、動詞の意味を過小評価するきらいがあった。動詞の意味とは「場」であり、「場」には動詞の項として働く意味役割、動詞の表す動作の様態、付随する道具等さまざまな情報が含まれる。構文はそのような「場」を言語記号化したものであり、従って、動詞の意味を丹念に探れば、構文の意味と形式は完全にとは言わないまでもある程度のところまで決定できるという予測が成り立つ。

構文独自の意味の正当化にあたって大きな役割を果たしたのは、特に指定された語彙項目を含む文や自動詞を主動詞とする他動詞構文などの特殊構文群であった。この種の構文が内包する問題は、動詞の概念構造を十分に精密化すれば、敢えて、構文という概念を持ち出す必然性がない場合もあるという点にある。従って、構文の意味を論じる場合、調査するデータ範囲をさらに広げて、核となる構文から周辺部の構文へとどのように構文ネットワークが広がっているかを丹念に調べることが欠かせない。

４．研究成果

（１）拡張の三段階説

Goldberg(1995,1997), Goldberg et al (2004) は動詞の意味と構文の意味との関係を三種類に分けて論じている。(i)動詞の意味と構文の意味が同一である関係、(ii)動詞が構文の表わす事象の手段の意味を担っている関係、そして(iii)手段以外の意味を担っている関係の三つである。動詞と構文の関係を論じる際には、この三つの段階を明瞭に区別して議論することが肝心である。Goldberg 等はこれらの関係を単に並列させているだけであるが、特に(i)は構文発生との関係で重要な意味を持っている。本研究では構文発生と拡張のメカニズムの中で三つを動的に関連付けて、(i) を「構文発生期」、(ii) を「構文拡張期」、(iii) を「構文再拡張期」として論じる。これらは動的文法理論に合わせて、言語習得の時間軸に沿った各習得段階に対応するものとして設定するが、文法内の静的な有標性の関係としても、認知文法における拡張関係としても解釈可能であり、基本的アイディアはさまざまな言語理論に取り込めるものである。

構文発生期の段階では、軽動詞構文の形式と意味が「構文」の原型を形作る。よって、動詞の意味と構文の意味は全く同一であり、Goldberg の用語によれば､動詞の意味は構文の意味と完全に重複（redundant with)し､その具体例化（instance, elaboration）にすぎない。動詞の意味と構文の意味はコインの裏と表の関係と同じで、二つが協調して、認識される基本的「場」を言語化しているのである。この構文発生期には、動詞の第一次拡張、すなわち、軽動詞を基に形成された構文の動詞スロットに、軽動詞と同クラスの他の動詞も生起できるようになる段階も含められる。

子供の言語習得の過程で構文に生じる動詞の種類が飛躍的に増大する段階がある(Brown 1973, Gropen et al 1989)。この時期を、構文発生期から構文拡張期へと進んでいく段階と捉える。これは軽動詞から他の動詞への拡大であるが、この段階では「動詞の意味と構文の意味は時間的に連続する動力学的関係によって統合されなければならない」という主旨の「力学的関係の仮説」を遵守する動詞のみが構文に認可される。構文拡張期になって初めて、動詞の意味と構文の意味の整合性（matching）が問題となる。文つまり構文は一本の使役連鎖を形作るもののみが認可されるので、動詞は構文の表わす意味のうち「原因」「手段」の意味部分を受け持つものでなければならない。

構文の形式と意味は、前段階の構文発生期において、既に動詞から完全に独立した存在として文法的構文として確立している。Bowerman(1978, 1988, 1990)で報告されて

いる二重目的語構文の過剰生成は、子供が言語習得のある時期に、動詞の意味と構文の意味と形式を完全に独立させて学習していることを示している。構文拡張期では、動詞の意味が構文の使役連鎖にうまく組み込むことができさえすれば、動詞の自他の区別や厳密下位範疇化素性の制限は無視して自由に使用することができる。例えば、ハンカチを吹き飛ばす原因となる動作 sneeze は自動詞であるが、他動詞結果構文に生じているし(John sneezed the handkerchief off the table)、脱走の抜け穴を作る動作 dig も自動詞であるが、One's Way 他動詞構文に生じることができる(John dug his way out of the prison)等。子供による構文過剰生成は「力学的関係の仮説」の発動（または習得）と共に無くなっていく。

構文の種類によるが、動詞スロットに生起する動詞が「力学的関係の仮説」を守る必要がない場合があり、これが「構文再拡張期」である。どのような動詞が「力学的関係の仮説」を逸脱できるのか、今のところ、明確な答えを与えることはできないが、社会的な常識や日常の経験の多寡によって生起可能な動詞の容認度が決められてくると言える。

具体例として二重目的語構文を取り上げてみると、拡張三段階説に基づく新しい構文ネットワークでは、「構文発生期」に軽動詞 give を基に二重目的語構文が形成され、さらに give との意味的類似性に基づいて動詞 pass, hand へと動詞類が拡大、次いで「構文拡張期」において「力学的関係の仮説」に依拠して動詞 throw, send, bring 類へ拡張し、最終段階の「構文再拡張期」において力学的関係によらない動詞 buy 類へと拡張する、というものになる。

（２）構文と動詞の関係

Time-away 構文等の自動詞不変化詞構文も、基本動詞となる他動詞から発生し、構文拡張期において自動詞へと拡張していくと考えれば、構文独自の意味的属性や不変化詞が特定の種類に固定化されて居ることが、自動的に説明できる。

構文発生期においては、軽動詞の意味特性そのものがすなわち構文であり、動詞の語彙特性と構文の意味はここでは完全に一致しており、構文の意味を形成する際に、動詞の意味と構文の意味という二つの実体に軽重の差はない。構文拡張期以後になって、二つが互いに独立した実体として文法内で機能するようになる。構文文法を批判する際に、「交替の可能性を最終的に決定しているのは個々の動詞の意味であって構文ではない」と主張する向きがあるが、これは一面では正しいといえる。しかし、この主張は構文拡張期以降の動詞と構文の意味を問題にしなければ、主張の根拠を失う。構文発生期の基本動詞およびそのクラスに属する動詞を引き合い出しても、優劣の議論が成立しない。なぜならば、構文の形式と意味が、構文発生期に習得される動詞の意味すなわち基本的事象としてのフレーム意味から生まれてくるので、この主張こそがまさに構文形成の発端になっているからである。例えば、二重目的語構文の「所有移送の成就」が構文の意味に由来するのか、または動詞の意味に由来するのかという議論があるが、give 類の動詞だけを根拠とするならば、そのような議論に全く説得力がないのは上のような事情による。

構文拡張期以後において動詞の意味は構文の意味とどのように関わるのだろうか。移動構文や二重目的語構文は三つの拡張段階を経て、下位構文同士が拡張関係によって互いに連結された階層を成している。そして、下位構文は拡張の過程で徐々に意味を変化させてきている。しかし、意味の変化の仕方は、構文の種類によって異なる。移動構文では、動詞は構文の意味における手段、移動の様態を明示的に付加する働きしか持たない。One's Way 構文でも同じである。二重目的語構文では、意味の添加と共に、構文の意味を変化させる積極的な働きも持っている。つまり、ある動作と物の授受に時間的なズレが生じていることが、構文の意味の変更をもたらす最大の要因であるが、これは動詞の語彙特性による。使役連鎖を満たすことによって構文に生起しえた動詞が、逆に、その意味によって構文の基本的な性格を変えてしまう働きを持つのである。こうなると、動詞の意味と構文の意味の優劣を論じることに、もはや何の意味もないことが明々白々となる。

本研究の三段階によって各種構文を捉え直すと、すべての構文が二重目的語構文のように三段階を経て拡張するのではなく、移動構文のように構文拡張期で終わるもの、Spray/Load 構文や奪取構文のように構文発生期にのみ留まる構文など、様々な構文があることが分かる。後者では、構文形成の spray 類、rob 類の基本動詞から、意味的類似性に基づいて、slather 類、heap 類、cram 類、deceive 類、cheat 類へとの動詞群 が拡大するが、それ以上、拡張することがない。その原因は、構文中の動詞以外の要素（of, into などの前置詞句）が構文全体の意味に積極的に関与しているという事実に求めることができる。構文発生期では動詞と構文の意味が一体化しているので、奪取構文や Spray/Load 構文の場合、動詞の意味を厳密に定義していけば、自動的に構文全体の意味が得られる。構文発生期のデータを処理している限り、語彙意味論と構文文法の対立はありえないのである。

（3）「場」または「フレーム」について

連続的な事象ネットワークの中から、ある事象を不連続な断片として切り取り言語記号化したものが動詞の意味となり、構文の意味となる。従って、動詞と構文には固有の「場」すなわち「フレーム意味」が備わっている。既に見たように、動詞のフレーム意味は、構文発生期には構文のプロトタイプ意味を決定するに当たって重要な働きをし、構文拡張期以後では、問題の動詞が構文に生起できるかどうかを左右する決定的要因ともなる。しかし、動詞のフレーム意味を言語学的に決定する際に、膨大な事象ネットワークの連続体のどこからどこまでを一つの事象として切り取るかは、それほど簡単な仕事ではない。

動詞のフレーム意味を無制限に拡大していくことは可能であるが、これを許すと、動詞の意味が構文の意味を完全に決定するということになり、構文という概念を設定する根拠が全くなくなる。フレーム意味の拡大は動詞の基本的意味を捉えることに繋がらず、また構文の意味を動詞一つ一つのフレーム意味に再記述せざるを得ないので、フレーム意味として盛り込む情報は、言語学的には最小限に制限する必要がある。

動詞のフレーム意味に何を盛り込むかは論理的に明確に定義できるものではないが、動詞に関して過去の事例を見てみると、フレーム意味の内容がやや鮮明になってくると思われる。おおよそ、「当該の動詞が表す動作が他の動作と区別されるために最低限必要な特徴」、「その動作に必ず付随する物理的、社会的、心理的要素」が、動詞のフレーム意味に指定されているようである。Goldberg (1995) において、文の容認可能性を動詞のフレーム意味を利用して説明している箇所が数箇所ある。動詞のフレーム意味と構文の意味の適合性を考慮しているところから、Goldberg 自身がどのような情報をフレーム意味に加えるべきと考えているか推測することができる。例えば、John sneezed the napkin off the table. を例に取ると、自動詞 sneeze のフレーム意味に激しい空気の放出が含まれていて、それが結果構文の表す意味と合致するので融合が可能になる、としている。Goldberg の意図は、強い息の放出が結果構文の表わす「使役連鎖」の一部つまり手段として解釈可能であるということで、sneeze のフレーム意味に強い息が引き起こす効果までをも含めていないことが窺える。動詞のフレーム意味を限定することは重要なことであり、話を単純化すれば、動詞 sneeze に関与する事象は無限に広がる可能性を持っているけれども、関与する事象のすべてに共通する現象が必ず存在するはずであるから、それを動詞 sneeze の「(核の) フレーム意味」と設定しておくことが望ましい。しかし、後の節で論じるが、フレーム意味はお互いの埋め込みを許して大きなフレーム意味を構成する可能性を持っているので、どこまでを動詞の「核のフレーム意味」とするかは判断が難しい。

動詞のフレーム意味と構文の意味がどのように関係しているか、John bought me a book.を例にとって考えてみよう。まず、動詞 buy の意味が成立する状況はほぼ次のようなものである。BUYER (John) がお金 MONEY を持っていて、他の人物 SELLER が品物 GOODS (a book) を持っている。BUYER は GOODS を欲しいと思い、SELLER は MONEY が欲しいと思う。二人の間で GOODS の金額に関して合意に達すると、BUYER が SELLER から GOODS を受け取り、SELLER が BUYER から MONEY を受け取る。動詞 buy の表わす行為には少なくとも、基本的なフレーム意味範疇として以上の BUYER, SELLER, MONEY, GOODS の四つの範疇が必要である。

しかし、動詞 buy のフレーム意味は、視点の移動によって、別の動詞のフレーム意味にも変化する。SELLER の視点から眺めれば SELL フレームに転換し、また、BUYER と MONEY の二つの属性詞に視点を移せば PAY フレームにもなる。つまり、動詞 buy, sell, pay のクラスを支配する「一般的フレーム意味」があって、その属性詞への視点の違いによって、個々の動詞の「個別的フレーム」が生成されている、ということができる。上の例では、「商取引のフレーム(Commercial Transaction Frame)」が一般的フレームで、その中のどの属性詞がプロファイルされるかによって、BUY フレーム、SELL フレーム、PAY フレームの個別的フレーム意味の差が浮かび上がる。

一般的フレームと個別的フレームの関係は、スキーマ(Schema)と個体例(Instance)との関係の類推で捉えてよい。一般的フレームは、各動詞の個別的フレームから共通する属性詞、値を抽出した個別的フレームの基本的骨格 (skeleton)である。構文発生期において徐々に蓄えられた軽動詞の個別的フレームから、構文形成と同時に一般的フレームが抽出され、構文のフレーム意味として定着し、後の構文拡張期において重要な役割を担う。拡張の三段階説のように個々の用法に重点を置いた理論では、個別的フレームの方が意味の中核を担うフレームであるといってよい。構文発生期においては構文の基本的意味の基礎となり、構文拡張期以後は一般的フレームと対比されて、二重目的語構文や Spray/Load 交替現象におけるように、構文の形式や意味に対して微妙な変化をもたらしたりする。

語彙や構文の意味を捉えるには、フレームという概念が重要であることは疑いないが、特に動詞や構文の意味を説明するにあたって、フレームのどこがポイントなのか判然としないまま、フレーム意味の重要性を説いても議論は空回りをするばかりである。フレームに生じる意味範疇、フレームの構造的特質、フレーム間または属性詞間の制約を明らかにすることによって、フレームのどのような記述内容がどのような言語現象の説明に役立つか次第に明らかになっていくと思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）
1.　浅川　照夫、「動詞の意味と構文の拡張（2)」、『国際文化研究科論集』、査読有、第 15 号、2007 年、37-53

2.　山田　誠、”An analysis of NP-ing constructions without abstract case features”、『国際文化研究科論集』、査読有、第 15 号、2007 年、55-64

3. 福地　肇、「英語学から見た英作文」、『英語青年』、査読無、153 巻 7 号、2007 年、396-397

〔学会発表〕（計　1 件）
1.　浅川　照夫、「通路・経路を表す前置詞」、日本英文学会、2008 年 5 月 25 日、広島大学

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

○取得状況（計　0 件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
浅川　照夫（Asakawa　Teruo）
東北大学・高等教育開発推進センター・教授
研究者番号：50101522

(2)研究分担者
1.　福地　肇（Fukuchi, Hajime）
東北大学･大学院情報科学研究科・教授
研究者番号：90015884
2.　山田　誠（Yamada, Makoto）
東北大学・大学院国際文化研究科･准教授
研究者番号：90200740

(3)連携研究者
なし